新しいソビエトの文学

НОВАЯ СОВЕТСКАЯ ЛИТЕРАТУРА

古代保存官　　根つけ[illegible]

ドンブロフスキー　工藤幸雄訳　ルイバコフ　[illegible]

3

НОВАЯ СОВЕТСКАЯ ЛИТЕРАТУРА

3

古代保存官＝ドンブロフスキー・工藤幸雄訳
根つけ綺譚＝ルイバコフ・吉上昭三訳

勁草書房

新しいソビエトの文学　3

古代保存官　ドンブロフスキー　工藤幸雄訳
根つけ綺譚　ルイバコフ　吉上昭三訳

発　行　1968. 2. 10.
発行者　井村寿二
発行所　勁草書房　東京都千代田区神田駿河台2の3
（株式会社大和出版部）　TEL 294-6121
定　価　580円
印刷者　白井倉之助　東京都青梅市根ケ布 385

落丁・乱丁本はおとりかえ致します　精興社印刷・牧製本
勁草分類 No. 8843

目次

古代保存官……ドンブロフスキー　工藤幸雄訳　1
根つけ綺譚……ルイバコフ　吉上昭三訳　239
解説……工藤幸雄　吉上昭三　351

古代保存官

ドンブロフスキー
工藤幸雄 訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部

I

初めて私があのただならぬ都会――世界中のどの都会とも似ても似つかぬ街を見たのは一九三三年のことであった。私はあのときの驚きの印象を忘れない。

モスクワを立ったのは雪どけのころで、雨雲のたれこめる、暖い日だった。思い出したようにぬか雨が降ってはやんだ、そして板塀の向こうに、濡れた遊歩道にまた家々の窓ぎわに置かれた花びんに褐色の柔かな芽がようやくわずかにふくらみ始めていた。私を見送ってくれたのは蕾のほころび切った赤い小枝のネコヤナギだった、黄色と白のまじった愛嬌のある花のかたち、それは小鳥の綿毛を集めてちいさく丸めたようであった。ほかには何の花も咲いていなかった。ところが、ひとたびこちらへ着くと私はにわかに南国の夏のただなかに置かれることになった。すべてが花咲いていた、咲くはずのないものまでが――崩れた土塀（雑草はそこから降って湧いたように生えている）、家々の壁、屋根、黄色いウキクサをいちめんに浮かせた溜り水、歩道から、車道まで咲いていた。

朝早い時間だった、道は遠かった。停車場から街までは乗り物で来たのだが、街にはいってからは歩かねばならなかった。だがアルマアタは眠っていた、道を尋ねようにも人影はない、私は当てずっぽに歩きだした。ともかく歩くことだ、突っ立っているよりはましだろう、そんな気分だった。私はずんずん歩きつづけた――三キロも歩いただろうか、気づいてみると、私は一周りして同じ所へもどっているのだった。困るのは、目じるしになるものがまるでないことである。どれもそっくり同じなのだ――土で固めた塀、その向こうにこれも土の家がきちんと立っている、白いのはめったになく、たいていは空色や緑色に塗られている（のちに知ったことだが、こちらでは白の塗料に硫酸塩をまぜるのが普通である）、かと思うと、シベリア風の頑丈な丸木小屋もある。板造りの鎧戸には錠は使わず黒い閂をかけたままである。ところどころに労働者用のバラックがある、黄色い二階建ての建物は鉄道建設関係の宿舎で、階段、バルコニー、ガラス張りのテラス――どれも規格どおりに作られている（トルケスタン――シベリア鉄道、いわゆるトルクシブの完成直後だった）。そうしてこうした家々がすべて、屋根の高さまですっぽりと庭にのみこまれ、沈みこんでいる。

庭はそこらじゅうにある。車道にまではみ出した庭さえみかけた——花壇、芝生、セメント製の小さな噴水。いろのチューリップ、赤や青のケシの花、そのなかで、濃い赤というか、赤紫というか、珍しい花もあった、それは黒っぽい艶光りのする葉をもった草花で、アルマアタの人たちはこれを氷河のあるあたりから見つけだして移植したものだが、その名は優しさと尊敬をこめて、マリヤ・コレヴナと名前と父称を並べて呼ぶのである。思うに、マリイン・コーレニ（マリヤの根）の訛りであろう。

またその先で、やはり車道まではみ出して、私を迎えてくれたのは白花のアカシアの木立ちだった。何げなく私は通りの角を曲がった——と突然、私を出迎えて駆けだしてきたのが、背の高い、ほっそりとした、しなやかな枝をくねらせたアカシアの一家族であった。《東方の踊り子たち》——ふと私は思った。実際、ウルシをかけたような赤い棘、真珠貝色の耳飾り（どうみても貝殻に似ている）、白い花の房（それは花嫁のかぶるヴェールにそっくりだ）、あの世に稀なしなやかさ——すべてが踊る乙女らを思わせた。アカシアの木々からは甘い香りがした、その匂いは重すぎるために流れて行かず、空中にじっとしているのだった。太陽はまだのぼらなかった。それでもアカシアのあたりには、蜂が羽音をひびかせ大きな、白い蝶が幾羽も舞っていた。その場所の眺めから、私はこの街の緑が段状に配置されているのを知った。最初の階——それはこのアカシアの木々である。アカシアを見おろして庭の果樹が茂る、その果樹よりも高くポプラがそびえる、そしてポプラの上に目をやれば、もはやそこには山々と、傾斜の森の青さがある。なによりも私を迷わせたのはそういう庭だった。どこにいるのかどうして見当がつくのだろう、街全体が一つの果樹園になっているとすれば——リンゴ園、アンズ園、サクラの園、ミカン園——バラ色の花、白い花、クリーム色の花。

果樹の庭をポプラが見おろしている。これも後に知ったことだが、ポプラこそこの都会では最も大切なものなのである。ポプラなしにアルマアタについて語ることはできないし、この街について考えることもできない。ポプラの木は街の誕生に立ちあった。通りもなく、家一軒なかったころに、ポプラはすでにそこにあったのだ。

家から家、街区から街区へ、全市にポプラが植わっている。街じゅうのどの窓からでも、ちょっと外を見やれば、すぐ目のまえに、あるいは白く光る、あるいは黒々としわの刻まれたポプラの幹がきっと見える。アルマアタからタシケントまで幹線道路が走っている——昼も夜も、この道をトラックが疾走する。だが、この道の名は通りでもなく、街道でもなく、道路でもない、ただ並木道なのだ。《タシケント・アレイ》——とアルマアタの

人たちは言う。その名に偽りはない、数百キロも打ちつづく大道はどこまでも果てしないポプラの大木の並木道である。

アルマアタのポプラ――それは非凡な木だ。それは高い、直立している、そしていつも、完全に近いほど不動である。大吹雪に襲われ、ほかの木が強風にうなりながら弓なりに曲がるようなときにも、ポプラだけは心持ち梢をふるわせるだけだ。木というよりは、凱旋する軍勢の巨大な縦隊が広場に整列していると思えばいい（忘れないでいただきたい、この巨人の一人びとりは優に百歳を越えているのである）。それにしても、ポプラほど活気と饒舌をもち合わせた木はほかにない。根もとから梢まで、ポプラは生き生きした細かい葉に満たされている、ポプラはざわめき、脈打ち、銀と黒の色合いに溢れている。

そしてポプラの向こうには連山が望まれる。

山脈は天山山脈の岐れである……そのさまは、一対の灰緑色の強大なつばさが街の上に大きく羽をひろげているかのようだ――いや、街は空中に支えられている、落ちぬようにしっかりとつかまえられている。だが、あの遠い朝、私の目に灰緑色に映ったのは山裾の方ばかり、針葉樹林がまどろみつつ横たわっているそのあたりであった――山頂はやさしいバラ色に彩られていたからだ。カスピ海を見たことのある人なら知っている――明け方の海上を舞うカモメたちはちょうどそのような色に燃えてみえる。

私は立ちつくした、目は山々に、ポプラに、そしてそれより低い白アカシアに当てながら、考えていた――どちらへ行こう、これではいつまでも道は見つかりそうもない。太陽がのぼった、人々はまだ眠っていた、とざされた錠と鎧戸と門と格子の向こうで――それでも街はもう目をさました。一時間も前からしきりにときを作る雄鶏の声がかしましかった。町じゅうの鶏小屋がわれ勝ちに大声を競っていた。ミザクラの果樹園では小鳥のさえずりが小やみなかった。ぱちぱちと電気のような音を立てながら赤や青色のイナゴが飛びたった。どこか裏手の方からにぎやかにカエルの声がした。この街に住む野生の動物たちの数は人間にひけをとらないことも、私はのちに知った。公園では夜ごとほうほうとフクロウが啼く。街の通りには、暗くなりかけたとみると、もうコウモリが舞いはじめ、夜啼きウグイスが鳴きだす、中心街のバス停留所の屋根で歌いもする。町はずれ（土地では昔のままに《村》と呼びならわしている）の板葺屋根にはキジを見かけることもある。赤や黄色のあざやかなのが、不安げに、あたりに目を配っていたりするのだ。棚山（土地の使い方では草の多い丘のことをこう呼ぶ）から飛ん

で来たものの何しに来たのか自分でも分からないというふうなのである。秋になると野性のヤギの走りまわるのが目だつ、辺鄙な果樹園をみつけて仔を産むのだ。一言でいえば、これはある動物学者が私に言ったことばだが、大自然の生活とこれほど近くに隣あっている大都会は、アルマアタをおいて他にない。

街路は装いをこらしていたとはお世辞にも言えない。その当時は五〇年代はおろか、四〇年代の《麗しきアルマアタ》の面影さえまだなかった——大小の農家は泥れんがの奇妙な造りで、建物の大半は壁になっており、小さな窓が一つ屋根のすぐ下についている、かと思うと、不意にクルミの実のようにがっしりしたロシア風の丸木小屋が現われる、彫刻のある窓わくを見せ、広い門がついている、と、その向こうの一区画にはずらりとトルクシブ鉄道関係の長細い宿舎が続く——いちめんの窓、テラス、ドア、階段——すると入れ代わって再び、大小の土造りの家々。粘土、泥れんが、薄板、萱。石造りもない、れんが建てもない。二階建ての新築は少ない——古いのは全くない。要するに、平和に眠りこけている今世紀初めのカザフの部落の姿がある。

突然、奇跡が起こった——通りを向こうに渡ったとたん、私はまるで別の街に来てしまったのである。ここまでくると、通りは広くなり、舗装されている、建物は数階建てで、上から下までみごとに装飾されている。どのビルも申し合わせたように表階段は教会のそのようにたっぷりして、白い石が使ってある。屋根も変わっていた——どれも円屋根で、その先に尖塔をつけたり、色塗りの小さな円屋根を重ねたり、ときには風見の鶏がついていた。どちらへ目を向けても、彫刻された用材が、白い石が、列柱が、模様つきの雨樋があった。

なかでも、ある建物は、その前を通っていると、まるでどこまでも、おそらく数区画も続くほど長かった。それは旧式な勧工場か、ないしはアーケード式の市場を思わせた。わけもなく私の頭にこんな名まえが浮かんだ——《実業館》とか《スラヴ市場》とか。《ジェロヴォイ・ドヴォル》の向かいには本物のシェヘラザードの宮殿が立っていた、ちょうどタバコの箱に描かれるレースをまとったような大きな御殿だ。屋根の頂きには塔があり、窓が多く、模様をほどこした大きな扉がみえている——いや、扉というよりは立派な門といった方がよい。思いきり、いっぱいに開いてみたくなるような門である。

私は角をまがった、すると有名な寺院が目にはいった。以前から何度となく話には聞いていたのだったが、私が見たものは全く思いがけない何ものかであった。寺院は街全体の上に懸っていた。きわだって高い屋根は、いく

つもの円屋根を持ち、色さまざまに塗られて、そこに模様を浮かせ、手のこんだ軒蛇腹をのぞかせ、波形の鉄の飾りをつけていた。鐘楼がある、階段――というより階段の全体系が備わっている、回廊がある、遊歩廊もついている。これこそは本物の聖ワシリー寺院だった、五十年前、当時の県の建築家の手で再建されたものである。寺院は公園のなかに立っている、そばには歩いている人影もなかった、ただ幅ひろい表の階段にカザフ人の年寄りが眠っていた、鉄砲を肩にかけ、フェルトの帽子をかぶっている。私は立ちどまり、咳ばらいをし、深く息をついた――老人はまだ眠っていた。私は老人の肩に触れた。老人は身うごきし、顔をあげ、私を見た、そして訛のないロシア語で尋ねた、何時かね。時計は向うにかかっていた。私たちはそろってその方に目をやった。もう五時を回っていた。

夜警の老人はため息をついた。

「朝早くつくようになったんだね、夏場(なつば)の列車は」彼は言った。(私はトランクをさげていたのだ)『あんた、停車場から来たところかね?……街じゅうを歩いたって? 大したもんだ! すると五露里(ヴェルスタ)(一露里はキロ強)は歩いたね、まっすぐ歩いたとして。土地の人じゃないって? ほう、よそ者かね。どこへ行くのかね、これから。ほう、十月通り(オクチャブリスカヤ)。なに、なに。すると昔の宿屋のことだね? いや、いや、今もやっている。旅の人はあそこに逗留するよ。ある、ある、それはあるとも。一九一一年に土地の者が建てたものだ。もちろん、だれだって知っている。革命戦のころは、ドミートリー・フールマノフ同志も住んでいたもんだ。あの人の『反乱』(中央アジアの小勢で反革命軍の扇動によって起こる赤衛軍の反乱を描いた一九二五年の作品。フールマノフは『チャパーエフ』で特に知られるが、彼自身、チャパーエフ師団の政治委員であった。)は読んだかね。あの宿屋のことも出てくる。ここからずっとまっすぐ行って、公園を抜けると、ぶつかった所がそこさ。すぐに見つかる。表玄関がひどく立派で、勾配つきの屋根の建物さ。すぐに分かりますよ。ひときわ目だつ建物だから。あれもゼンコフの建てたもんでね」

「だれのだって」私は聞きかえした。「ゼン……ゼンコフの?」

「そう、ゼンコフ、ゼンコフのさ」夜警の老人は根気よく繰りかえした。「なるほど、あんたは土地の者じゃないわけだ。アンドレイ・パヴロヴィチ・ゼンコフといってな。帝政時代に、この街をすっかり建て直した人だ――これをそっくりな!」夜警は手で円を描いた。「この寺院もそうさ。寺院だろうが、アーケードだろうが、シャフヴォロストフの店だろうが、将校集会所も、貴族会館も、それから中学校が二つと、区裁判所も(いまは印刷工場になっているが)――ぜん、ぜんぶなのさ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「まさか、一人の人間がすっかり建てたって？」私は質問した。

「一人だとも――十人じゃない！」彼は満足そうに請け合った。「アンドレイ・パヴロヴィチ・ゼンコフ技師といってな。どえらい建築家だった。いまも生きている。でも今は……あの人のことは、わしは今だって時どき思い出す。すると、思い出すのは、ここに何もなくなったころのことだ。きれいさっぱり大地震でやられてな。瓦礫の山しか残らなかった。わしの若いころのことで、日雇いで働いたもんだ。シャベルをかついで、ここらあたりに狩りだされたよ。何でも、街をそっくり別の場所に移したらよかろうということになって、ゼンコフに相談を持ちかけた、すると、それはよくないと返事したもんだ。《移す理由は何もない――これまでの建て方がまちがっていた、だからやられてしまった。正しい建て方をすることだ、そうすればいつまでも倒れはしない。どんな地震にもびくともしない》ってな。そのとおり、こうやって建っている、びくともしない」

「なるほど、でもその後、地震がなかったのじゃないかな」私は尋ねた。

「とんでもない！　一九一一年がそうだよ」夜警は色をなした。「それはひどい大地震だった。地面は落ちこむ、山は裂ける。ところが、ゼンコフの建物は、ちゃんとそのまま残った。ガラスも飛びゃしない。知ってるかね、この建物がどういうものか。高さは世界で二番目。そのくせ釘一本、かすがい一つ使わない、正真正銘の木造さ。どうなってるのか、だれにも分からない、ひょっとすると、何かニカワのようなものでも。世界中が頭をひねった。外国人もやってきた――よくよく見て回ったが、どうやってできているのか、まるで見当もつかない。そういういわれのある建物よ。それをあんたは《地震はなかった！》だなんて。あったとも、大ありだよ……」

彼は手を一振りしてベルダン銃を肩にかけ、寺院の見回りに歩きだした。（訳注「手を一振りする」、「片手を振る」は文字どおりの仕ぐさだが、相手の言うことにあきれたり、おどろいたり、あるいは状況全体を打ち消したりするときの日常の身ぶり。上から下へよりも、上から斜め下に振りおろす。以下、しばしば出てくるので念のため。）

こうして、列車のステップを降りてアルマアタの地を踏んでから数時間のちに私は最初に出遇ったカザフの老人の口から初めてあの名を耳にしたのである。《アンドレイ・パヴロヴィチ・ゼンコフ。有名な技師――震災後のヴェルヌイ市を再建》（訳注　アルマアタは帝政時代から一九二一年までヴェルヌイと呼称された）

一九六〇年の秋、アルマアタを立って私はカザフスタン中央博物館に立ちよって、ゼンコフの建てた建物いっさいの写真をほしいと頼んだ。博物館には旧知の知人たちがいる。その昔、二年間、上級学術研究員としてここ

に勤めたおかげである。私はそのころ任されたことは何でもやった――学術調査や出張旅行に出る、古墳の丘の発掘、古い土器類の目録づくり、タイピスト嬢（かなりくたびれた感じの中年過ぎの女だった）を相手に、何とはなしに博物館に迷いこんでくる世界中の物、たとえばニコライ帝時代のコペイカ貨からジャワ諸島産のムササビに至るまでの展示品いっさいの解説を口述する、そのほか大小の、また有用無用の仕事を山と片づけもする――博物館の人たちはそういう私をおぼえていてくれた。五分後には、女性の館員が写真の山を持ちこんできた。だれか知らぬが、写真は気をつかって印画紙入れの大封筒に入れてあった。私はそれをあけ、袋を振った。机のうえには古いヴェルヌイの街頭風景がつぎつぎにばらまかれた――どの建物もゼンコフその人が設計し、計算し、建築したものである。黒ずんだ春景色が映っている、泥水の小川の静かな流れに、欄干も何もない木の橋が渡してある、あたりのヤナギの木々は裸の細い枝をたれている。その向こうに見える木造建ては将校集会所だ、それはしゃれた、華麗な高い建物で、ワガニコフ通りにあるだれやらの商人の記念碑とも、公園にあるベニヤ板造りのピラミッドとも違う――ロシア様式の御殿ふうのもので、屋根つきの車寄せはあくまで高く、風見の雞もいくつか立ち、軒飾りまである。そばにはひげだらけの百姓が立ちどまり、微笑しながらカメラのレンズに顔を向けている。車寄せの奥は幅広い階段になり、そこに小さなドアがある――それが不動と威厳といった印象を与えるのは、建築家ゼンコフの計算どおりなのであろう。彼はなかなかの凝り屋でもあった。これはいわば大きな宝石箱なのだ、もっともそれにしては不器用で見すかしではあるが、木でこしらえたレース編みや飾りをすっぽりかぶせてある。

まだまだ幾枚もの写真があった。勾配屋根のにぶい感じのものが目にとまる（どう見ても小麦粉入れの箱のようだ）、それが主教の住宅である。大仰で簡素という点では、ボタンというボタンをすっかりはめた官吏の制服を連想させるものもある、それが中学校の校舎だ（フルンゼはここで学んだ）。植民地商品（茶、コーヒー、米、各種の薬味など）を扱う商人の店……商人……私にはその姓が読みとれない、光る金属の文字は虹のように大きく弧を描く高い看板に組まれているのだが、& Sons（父子商会）とあるところだけが読めた。

古い写真には、この都会のどこか野性味のあるそして滑稽な青春が、驚くほど正確に、明瞭に現われていた。写真のなかではすべてが若々しく、世間ずれしていない。ここの前景には、細々しい木が一本くねくねと立ち、枝はてっぺんの方にだけ申しわけ程度についている、こんな木は今はおよそアルマアタのどこの通りにも見かけな

い。現在では山々のふもとから鉄道駅まで、片ときもざわめきをやめない緑の流れが見わたすかぎり走っている。その緑はあまりにも深い、そのため街灯が緑にみえるほどだ。写真に映っているのは節くれだった、かたわの、妙ちきりんなやつである。だが、私はこの一本の木のことははっきり知っている。それは今日も同じ場所に茂っている、クラシン通りとゴーリキー通りの角のところだ。この木の下で、私はさまざまな人と会った、私はそこを落ち合い場所にしたものだった。それは黒々とした幹の、ゆたかに葉ずれをきかせる巨木に成長している、アルマアタの通りを見守るその仲間たちすべてと同じように。すると、これは何年前の写真なのだろうか。三十年、四十年、五十年？　もっと古いのか。

店の表戸は開いていて、その前には老いぼれ馬が頭を垂れ、荷馬車につながれている、馬車に乗った人影は二つ、長靴の足をたらし、そして待っている。もう一頭が手前の方を歩いて行く——私は知っている、小麦粉市場からきた馬車だ、卸し商人シャフヴォロストフの倉庫から出てきたところなのだ。いまではそこに工場の建物がある、しかしここには、あれらの白い、背のひくい、窓のない、まだ僧院の塀を思わせる建物が映っている。男が二人、元気な急ぎ足で歩いて行く——この二人とも長靴だ（七河地方（セミレーチェ）と呼ばれるこのあたりでは、短靴は敬遠される）。表（おもて）の階段に坐っているのは（こうなると虫めがねの助けを借りざるをえないのだが）おばさんが二人でそばにはめいめい袋をひろげている。ヒマワリの種（訳注　中国料理のカボチャやスイカの種のように食用にする。）を売っているのだろうか。おばさん、こんな所じゃ売り切れっこないよ！　数えてみる——歩いている二人、馬車の二人、それにこの二人——合わせて六人。考えてもほしい！　街じゅうでいちばん賑やかな場所の二つの街区の長さに、しかも明るい上天気の日なのに六人しかいないのである。

それはともかく、これが、ある夢のように遠い年——一九一〇年ないしは一一年——の早春、ゼンコフのしゃれた建物のあたりに繰りひろげられた風景である。私はこういう古い写真を眺めるのが好きだ、そしてもう五十年も前のその場所を、私自身も歩いてみる。写真のなかでは、いっさいがまじりあって華やぎ、すべての上に何か新しい、鋭い、サイドライト（ライサード）が注がれる。物はその光によって若返り、人々は笑いながら前面に浮きだし、大地にはまりこんでしまった建物は再びその前面と彫刻のあるしゃれた頭をもたげるのである。

いつの年か、ある晴れた春の日、一人の漫遊写真家が（万国郵便連合代表と絵はがきは書いてある）、ここの車道に三脚を据え、物見だかい連中を手ぶりで追いやってはシャッターを切ったのであろう。それは五十年も昔の

ことになる、そして半世紀たった今、私は、この写真家がその目でみたものをこうして眺めている。写真家は奇異の目をみはった――そして私も奇異をおぼえる。彼はこれらすべての非凡な円屋根や虹の形や尖塔に喜びをおぼえた――私もまたそれらを楽しんでいる。

このすばらしいものを建てた建築家その人について、私の知識はいまだに豊富とはいえない。分かっているのは、彼が軍事工学の専門家（当時の言いかたでは《築城家》）であったこと、仕事は敏速で、しかも華麗であったばかりでなく――これが重要なのだが――頑丈だったことである。そして、このことはヴェルヌイでは何よりも高く評価されている。

そのころ、ヴェルヌイ市は人さわがせな悪評をもって鳴った。世界の涯、恐るべき破壊力をもった大地震の巣、火山の上に建つ都会――として知られていたのだ。

ヴェルヌイのような街では、木造の箱のような家を建てるか、それともぺったりした平屋建てにして壁を厚く、基礎も強くして、大地にはめこむようにするか、二つに一つだといわれていた。

ところがゼンコフは反対した――必要なのはセメントと鉄と木材だ。こうして彼は天山産のモミ材を使って数階の建築物を建てはじめた。中心街をかこむように堂々たる豪華建築を作ったうえに、これでは最初の揺れで倒壊は必至と思われるようなものをそこに添えた――尖塔、円屋根、塔。地震など恐れるにたらず――とあざ笑うかのようであった。

《未来の成功を深く信ずる余は、われらが街について、またセミレチェンスク州またの名、地震州について、何らの懸念を抱くものでない》とゼンコフは《セミレチェンスク州報知》[1]に書いた。《余は其の未来を信ずる……われらの街は堅牢なる、数階建ての石造、鉄筋其の他の耐久建築物に依って飾られるであろうと余は信じている。……基礎づくりに特別の工夫を以てするなら……三十―四十階の高層ビルヂングの建設も充分に可能である……》そして、さらに《人間の観察的知力、そのエネルギー、創造の資性は、大自然の力を克服し来たったものであるが――（ゼンコフは自らの高尚な天職について語るとき、すばらしい用語を発見する）――これを考うるとき、地震の破壊力たりとも、人間の巨大な建築物にとって恐るるにたらずとの希望の湧き上がるのを禁じ得ない》

（1）一九一一年三月八日および十日付。

あえて注意を喚起すなら、これが書かれた一九一一年三月とは、かの大震災――震度十級――の直後であることだ。[2]

（2）この地震はきわめて大きかった。その後、当分のあいだ引き続いた地鳴りは、大鐘の響きにも似たといわれ

る。《地震現象として、学者諸賢（翰林院会員ゴリツィン）の看る所によれば、今回の地震は学術上知らるる最大の物の一なり。其の威力は最近のメッシナ地震、シェーマッハ地震、並びに一八八七年の同じくヴェルヌイ市に於る地震の孰れをも優に凌駕す。欧州の多数の地震観測所にあっては今回の地震の際、地震計に損傷を来し、ために故障を生じたが、かかる事は地震史上、空前絶後とす》（バグラチオン・ムフリンスキー公爵の報告書、《セミレチェンスク州報知》一九一一年四月十五日付）

この第二次震災は犠牲者の数もまた極めて大きかった（ただし第一次震災に比べれば十分の一）、にもかかわらず、ゼンコフの建てた豪壮建築のうち倒壊したものは皆無であった。木材は彼を裏切らなかった！　ゼンコフの最大の労作である大寺院の場合は、ガラス窓までが無事であった。《高さにおいては規模最大ではあるが――彼は自著に言う――是（寺院）はすこぶる柔軟性ある構造を有している。鐘楼は、大木の梢の如く揺れかつは曲がり、柔軟な角材の如き作用をなした》

読むうちに目に浮かぶのは、地震に揺れるヴェルヌイの街にポプラの木々が大きく揺れ、枝をきしませるさまである。

ゼンコフは、そのポプラのように高く、そして柔軟な建物を建てることに成功した。それ以上にどのような賛辞があろう！　そうして街はもちこたえた。街は何も失わなかった。殿堂も、中学校も、店も、寺院もすべてが無傷のまま残った。そして今もそのままの姿でわれわれの目に映る。時間は、たしかに、ゼンコフの作品群に多少の修正を施しはした。ある場所では車寄せを取りのぞき、別の場所では壁に扉をくりぬいた、だが、それは何でもない、些細なことだ――全体として、建物は変わってはいない。ゼンコフの作りあげた中心街も変わらなかった。だから、たとえば、ゴーリキー通り（旧トルゴヴァヤ）を歩い行き、しゃれた木造建築のアンサンブル――木で作ったレース模様、尖端のとがった窓（ただしゴチック様式と思い違わないでほしい！）、垂れさがるアーチ、低くおりてくる櫛状屋根のテントのように広く開かれている両翼――などを目にするとき、きっと分かってもらえるはずだ――すなわち、このゼンコフのすべては、すなわち、彼の塊、彼の名人芸、彼の美についての理解そのものである、と。彼の遺産のうち人間、時間、地震の侵犯を受けたものは何ひとつない。なかんずく地震によって。実際、地震はもはやゼンコフの街にとっては恐るべきものではなくなっている――鉄筋コンクリート、石造、多階、耐久の都市、五十年前、彼が《セミレチェンスク州報知》に書いたその都会にとっては。

私はひと昔まえ――つまり光栄の時代のゼンコフの写

真を見たことがある。まだ若き、紅顔の青年将校で、颯爽とした姿に緊張がみなぎっている。どことなく――あるいは神経的な面やつれのせいか、士官好みの口ひげのせいか、それともどの写真にも決まって登場する獅子の模様つきの将校マントのせいか――彼の容姿は驚くほどシュミット大尉（訳注　同名のバステルナークの長詩に描かれた人物）を思わせるものがある。

そのほかに私がゼンコフについて知っていることといえば、彼が美しい物を愛したということである。もっと正確には、美しいもの、というよりは細工の凝ったものというべきだろう。博物館にはウラル石で作られたゼンコフ愛用のシガレットケースが保存されている。ケースは余すところなく一面の模様である。頭文字がある、細かな図案がある、濃い青や赤のエナメルを使ってあって、小さな絵や風景で埋まっている。手のひらほどの広さのなかに、色さまざまな装飾的な小さな品が二十、三十となく描かれているのである。私はこの不思議なおもちゃを眺めて思った――これはゼンコフ自身の仕事そのものとそっくりではないか、と。半世紀のあいだ、この非凡な建築家は、当局者が、また私的な個人の注文するがままに、計算し、設計し、そしてすべてを建てた――個人住宅、橋、教会、礼拝堂、商店、売店。彼はただ一つのプランに基づいてそれらを建てた。彼は露出した空間を我慢できなかった、だから、それが可能な場所では、どこでも、むき出しの空間を埋めたものだ――蛇腹を上の方に集中しておいて、こんどは上の方からそれをぶちこわす、屋根の線を曲げ、それをこわし、目だたない彫刻でそれを飾る、そして、いよいよ仕上げのときがくると、いっさいのものを据えるための台座として、表玄関という広大な、滑らかな額のような場を築きあげ、そのうえでそこをさらに円屋根で蔽うのである。震災に潰えさったこの都会に、彼は尖塔を築きあげ、窓の上方にはアーチを配置し、窓には格子をはめ、それらの格子を朱に、また緑に塗った（ただし黄土色は嫌ったようである）。そして、私は思うのだが、ニージニー・ノヴゴロドの産業博覧会のすばらしい展示館のかずかずが彼にとっては終生、美と軽妙と豊富の理想として残っていたようである。

まさにこの理由から、彼の手がけた建物はどれにしても、過たずにこれだ――と見分けられる。目じるしとなるのは、彫刻のある窓わくであり、藍色に塗った鉄材であり、扉、屋根、車寄せ、そして殊にも、それら全体をまとめる上の自由闊達な結合ぶりである。この様式が街そのものの様式とはならなかったことについては、ゼンコフには何の責任もない。その当時、ヴェルヌイ市にはどのような様式もなかったし、またありえなかったの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com